# メディアが及ぼす性の多様性社会への影響

3年5組29番　福原澪

1.はじめに

私は同性愛というテーマで研究し学びを深めてきた。このテーマに興味を持った動機として小学生の頃のある経験がある。小学生の頃ある男の子が女の子らしい佇まいをしていて、不思議に思い母に「普通じゃない子がいる」と言ってしまった。すると母は「普通ってなに？自分の普通を人に押し付けちゃダメ」と言った。この出来事から私は自分の中のものさしで人やものを見ることをやめるようにした。色んな色や色んな形がある世の中で一人一人好きになるものや嫌いになるものは違うのだ。それなのに、人を好きになることは女性は男性を男性は女性をという考え方が社会の中でできてしまっていることに違和感を感じ嫌だなと思った。だから同性愛について探究して考えを深めようと思った。

例として3人の女性の会話をあげよう。Aさん（女性）「Bさん（女性）、恋人できたって聞いたよ」と言ってCさんがそれに対して「彼氏ってどんな人？」と問いかけた。

このような場面は私たちの生活の中で沢山あると思う。女性の恋人は彼氏、男性の恋人は彼女と想定されがちだろう。でも異性を好きになる人だけでなく同性、両性を好きになる人もいるということをわかっておかないと知らない間に人を傷つけてしまうかもしれない。性は多様なのだ。

2.序論

そして、私は様々な調査の結果から同性愛が現在どのような状況におかれているのか考えてみることにした。静岡県の浜松市が2019年にとった性の多様性への理解があるかどうかについての調査によると、理解が進んでいる人は30%を超えていることがわかったそうだ。また、president onlineの世界価値観調査による同性愛に対する日本人の移り変わりという調査によると、年々同性愛への許容度が増えていることがわかったそうだ。しかし同性愛に反対の人も少なからずいることも分かったようだ。庵通報のカミングアウトをしない人に抵抗がある人の理由は何かという調査によると、さまざまな理由があるが2番目に多いのが偏見

を持たれたくないからという理由だということが分かったそうだ。これらの調査から私は同性愛が昔に比べて人々に認識されるようになったにも関わらずひどい偏見や同性愛に反対する人がいることで同性愛者の方が生きにくい社会になっているのではないかと考えた。そこで私は同性カップルが堂々とお付き合いできる社会を作るにはどうすれば良いか。という問いを立てた。

2010年の有馬蔣太と園田直子の久留米大「学心理学研究によると今ある同性愛の問題としては主に、性的活動の問題、これは同性愛者の方がいざ実践しようとすればさまざまな困難に直面する ことになるというもので、カミングアウトの問題は同性愛者は同性に 性的欲求を抱くため友人関係になれなかったり，同性 愛者であることが明るいに出たとき関係が壊れてし まったりするというものであるそうだ。また世界の二重構造化(同性愛者の世界、異性愛者の世界)の問題 も上がっているようだ。これは同性愛者は、一般的 な社会を異性愛者の社会、同性愛者のみの存在する世 界を同性愛者の世界と呼んで区別しているという問題である。同性愛者を対象とする研究の困難さは主に、同性愛者にアクセスすること、研究者のセクシュアリティが影響すること、性的な内容を取り扱うことなどが上がっているそうだ。確かに同性愛は性のことなので触れにくい問題だなと思う。また先行研究において異性愛者と同性愛者の両方が研究者として関わっているものはまだ見受けられないことや同性愛者の方に会って話を聞くというのが難しいことなどから同性愛に関する研究が困難になっているそうだ。

同性愛というテーマにアンケートや調査を行ってアプローチすることは誰かを傷つけたりする危険性があるため難しい、と思った。そこでアメリカの映画バズ・ライトイヤーに同性愛のシーンがあり、14カ国で上映禁止された問題を取り上げ分析し同性愛がなぜ差別されるのかを考えていきたいと思う。

3.本論

まずこの問題の内容を説明しよう。アメリカ映画「バズ・ライトイヤー」は、同性カップルのキスシーンがあるという理由で、中東など14か国で上映禁止になっている。UAE（＝アラブ首長国連邦）は、Twitterに「アニメ映画『バズ・ライトイヤー』は、国内のメディアコンテンツ基準に違反している」と投稿しUAEで公開が予定されていたアメリカのディズニーとピクサーの映画「バズ・ライトイヤー」の上映を禁止したと発表したのだ。ロイター通信によると、その理由は、映画の中で同性カップルが短いキスをするシーンがあったためだという。バズ・ライトイヤーの声優をつとめたクリス・エバンスさんは「社会にあるべき包容力がないことに、もどかしい思いがします」と述べた。映画のプロデューサー、ギャリン・サスマンさんは「映画に不適切なものはなく、愛をもって生きることを描いた映画です」と話していた。同様の理由で、中東とアジアのあわせて14か国で上映禁止になっている。製作者側によると、中国から該当のシーンについて削除の依頼があったものの、「応じるつもりはない」とし、「中国でも上映はされないだろう」と話している。

なぜこのような問題が起こっているのか、アラブ首長国連邦に焦点を当てて考えたいと思う。アラブ首長国連邦は国内のメディアコンテンツ基準に違反していると主張しているがアラブ首長国連邦のメディアコンテンツ基準とはなんなのだろうか。アラブ首長国連邦通信によるとコンテンツ規制の欄に憲法 30 条で言論・表現の自由を保障しているが、法律の範囲内としており、王 族批判や宗教、性的な表現等についてはコンテンツ規制がかけられている。と記入されていた。このことから14カ国でバズ・ライトイヤーの映画が上映禁止になっ

たのは憲法上でメディアコンテンツでの性的な表現の規制がかかっているからだと考えられる。反対に同性愛者が住みやすい国もある。同性愛者に優しい国ランキングによると、上位を占めたのは、EU諸国を中心とする欧米の国々。2位のアイスランドでは、2010年6月27日に同性婚が合法化されたと同時に当時の女性首相が、長年のパートナーであった女性作家と正式に入籍したことでも話題となった。このように国によって同性愛に対する考えは様々である。日本は同性婚が正式に認められていないが、近年ではボーイズラブいわゆるBLと呼ばれる漫画やアニメも人気がある。これらの作品によって異性愛者じゃないとダメというような固定概念を崩していけるのではないかと思う。

4.結論

今は同性カップルが堂々とお付き合いできる社会ではないが、日本には遅かれ早かれそんな社会になる日が来ると思う。しかし上映禁止になった14カ国はずっと同性愛者の方が生きにくい社会を作っていくことになると思う。同性愛を
知らないまま育ち、自分が当事者になった時に固定観念によって自分が変だと思ってしまい苦しむ人が増えていくと思う。メディアは人々に大きな影響を与えるのだ。私は更にどのような視点から社会に根付く同性愛に対する固定概念を崩すルートがあるか探求したいと思う。

5.おわりに

今現在、社会では恋愛において「異性を好きになるものだ」という固定観念が根付いてしまっている。そのため自分が同性愛者であると気づいた人は隠さなければいけない、自分はおかしいなどという考えを持ってしまう場合が多いと思う。私たちが軽い気持ちで同性愛の話に介入してしまったら相手を傷つけてしまうかもしれない。だから、同性愛に対する問題は触れにくくてアプローチするのが難しかった。私はこの探求からこれまで気に留めていなかった視点に目を向けるようになった。主にメディアだ。学生の間で流行している恋愛リアリティショーに今まで疑問を持つことはなかったが、探究をしてからこのような影響力を持つ番組が同性愛に対する固定概念を生み出しているのではないかと思った。探求で得た学びを生かして、今後更にメディアに対する意識を深めて次世代の子供たちが誰かが傷つくような当たり前という考えを生み出さないようにできるような大人になりたいと私は思う。

6.参考文献・出典

・日本語論文･･･有馬蔣太・園田直子,2010年,「同性愛者のセクシュアリティ」,久留米大学心理学研究
・海外映画･･･ピクサー・アニメーション・スタジオ、ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ,2022年,「バズ・ライトイヤー」
・規則･･･アラブ首長国連邦メディアコンテンツ基準